

## 自らが受けたいと思う 医療と介護を創造



### 個別ケアを重視し、 一人一人の人生に寄り添う

ひとは誰でも老いる。これまで容易にできていたことが難しくなり、他人の力を借りなければ生活しにくい場面も増えてくる。しかし心身が衰えても、ひとは一人一人違った感情を持ち、積み重ねてきた経験や想いも異なる。「自らが受けたいと思う医療と介護の創造」が、当社の理念。一人一人の人生に寄り添い、個性やニーズに合わせた個別ケアを重視しています」と力を込めるのは、

地方に、専門スタッフによるリハビリサービスを提供する場を作り、在宅への復帰をサポートするのが狙いでした」と説明する吉村さん。島根県内では水澄み会が1996年、介護老人保健施設（老健）《アゼーリみずすみ》を浜田市に開設したのを皮切りに、グループホームや通所リハビリテーションなど、県内4市で32事業所を運営する。

《医療法人社団 水澄み会》事業管理部次長の吉村和代さん(46)。医療も介護も、いつ自分が、受ける側に回るか分からない。受け手の立場に立ち、老いや障がいがあっても尊厳を守れるようなケアを提供する――。それが、水澄み会の信条だ。広域のかつ地域密着で運営展開している《湖山医療福祉グループ》の

グループ共通の理念が、「こやまケア」と呼ばれる個別ケア重視の考え方だ。「歩んでこられた人生や個性は皆違います。たとえば食事や風呂も、同じ時間に一緒にサービス提供するのではなく、できるだけ個々のペースや想いに寄り添うよう心掛けています」。近年は、少人数の利用者を一つのユニットとして、固定されたスタッフでケアを行うユニットケアを推進。各人の生活リズムを熟知したスタッフがケアするため、近い距離感でニーズに対応できるのが特色だ。

一つ、元々、東京・銀座で病院を経営していたグループが、リハビリ施設が乏しい地方の現状を目の当たりにして介護事業に参入した。全国各地で事業を展開し、現在、グループ全体で働く職員数は1万3000人。業界最大規模を誇る。「リハビリを継続的に見える施設がなかった

生身の人間と向き合う介護の世界では、スタッフの悩みも少なくない。グループでは年に一度、「こやまケア学会」と称する研究事例発表会を開催。全国約260の施設がつながり、現場スタッフが日々々の悩みや課題、解決事例などを報告し合っており、研さんにつなげている。コ

ロナ禍にはオンラインで実施、ユーザー配信も行った。「介護スタッフの孤独感を解消するとともに、課題解決のヒントを得る重要な場となっています」。2013年には、働きながら介護福祉士の資格を取得できる《KOYAMA College》を開校。費用は全額、グループが負担している。21年からは社会福祉士の資格取得も可能となった。

### 大規模の高齢者住宅が 22年春、松江にオープン

22年春には、JR松江駅から徒歩3分という好立地にグループ最大規模の高齢者住宅《松江センターアゼリア》を開設した。9階建てのビル内に、サービス付き高齢者向け住宅(サ高住)200室と、老健105床を併せ持ち、介護サービスが必要になってからも安心して暮らせるのが特徴だ。サ高住で介護サービスを利用する際は、系列事業所だけでなく、他の事業者のデイや訪問介護なども自由を選択できる。個別ケアを重視する「こやまケア」の理念が反映されているのだ。同年11月にはコソニビエンスストアも入り、入居者の利便性が一層向上した。

最大335人の食事を作れる厨房を設けるなど、安心と快適さを兼ね備えた施設となっている。「商業地や駅に近いので、外出やショッピングなども気軽に楽しんでいただいているよです」と話すのは、同じ湖山医療福祉グループに所属する神奈川県社会福祉法人から22年秋に移ってきた、高橋得法事業部長(50)。20年以上、高齢者や障がい者、児童などさまざまな分野の福祉事業に携わってきた高橋部長がスタッフに求めるのは、ロボットやAIにない人の力だ。「利他の心」で何ができるか。ヒューマンスキルを高めていくことが大切です。そのためにも高橋部長が重視するのは、思いを口にする。こと。「松江の人は奥ゆかしいですね。でも個々の考えを発言し合えることは、いいチーム作りに欠かせないと思います」

### 食事で健康をつくる

松江センターアゼリアでは、開所前から浜田市の老健で経験を積んできた若いスタッフが数多く関わり、現場の中心となって活躍している。管理栄養士の河野まどかさん(23)もその一人だ。「元々食べるのが大好き。食事で健康状態を良くするという栄養士という仕事を知り、興味を持って資格を取りました。地



1 「食事、入浴、排せつ」の3大介護だけを提供する時代は終わった。利用者さんの、人としての本質を客観的に見て、接することが大事」と話す高橋事業部長 2 事業管理部次長の吉村さんが強調するのは、受け手の立場に立ったサービスの大切さだ



**医療法人社団 水澄み会**

業種 介護保険事業

事業内容 介護老人保健施設、デイサービス、グループホーム、居宅介護支援事業所、訪問介護、有料老人ホーム、小規模多機能型ホーム、サービス付き高齢者向け住宅

創業 平成8(1996)年4月1日  
 代表者 理事長 湖山 泰成  
 社員数 400名

〒699-3213  
 島根県浜田市三隅町河内451-1  
 TEL/0855-32-3911  
<http://www.mizusumikai.or.jp/>

- 〔浜田エリア〕
- 介護老人保健施設 アゼーリみずすみ
  - デイサービスセンターはまぼうふう
  - グループホームはまぼうふう
  - グランドケアホームはまぼうふう (介護付き有料老人ホーム)
  - とびの郷ゆうなぎ (住宅型有料老人ホーム・デイサービス)
- 〔松江エリア〕
- 高齢者複合施設アゼリア
  - プランチャアゼリア (デイサービス・グループホーム)
  - 松江センターアゼリア (介護老人保健施設・サービス付き高齢者向け住宅)
- 〔江津エリア〕
- もやいの家松平 (デイサービス)
- 〔益田エリア〕
- もやいの家うのはな (デイサービス・グループホーム・住宅型有料老人ホーム)
  - もやいの家ひきみ (デイサービス・グループホーム・住宅型有料老人ホーム)

**求める人材像** Check!!

- 人に対する思いが強く、困っている方を見逃ごせない心豊かな方
- 上手にできなくても良いので、最後まで自分の力でやり遂げる強い気持ちをお持ちの方
- 人のために奉仕できる、そのような気持ちを持っている方

資料請求・お問い合わせ先

採用直通 TEL

**0852-32-8388**

採用直通 E-mail

[mizusumikai-saiyou@lily.ocn.ne.jp](mailto:mizusumikai-saiyou@lily.ocn.ne.jp)

資料請求

インターンシップ

会社見学

公式サイトは  
こちら



13



8



4



1

1 2 3 利用者の日常を支える介護職の池田さん。積極的にコミュニケーションを取って、笑顔を引き出している 4  
 5 6 利用者に食事の好みを聞いたり、他職種スタッフに相談したりしながら、食を通したリハビリを実現する河野さん 7 利用者が摂取しやすい料理を考えるのも管理栄養士の業務の一つ。味付けや形状などに工夫を凝らす 8  
 9 10 「働くことは私にとって生きがい」と話すベテラン看護師の倉橋さん。豊かな現場経験を生かし、介護現場ならではの支援に注力する 11 高齢者が安心して生活できるサ高住。一般的な介護施設より自由度が高く、外出や外泊などもフリーに行える 12 まるでホテルのロビーのような雰囲気の《松江センターアゼリア》 玄関ホール 13 グループ最大規模の高齢者住宅《松江センターアゼリア》



1



9



6



5



12



11



7



3



2

**ワークライフバランスを実現**

リハビリや医療ケアを担う老健では、医療職の存在も大きい。看護師の倉橋久美子さんの(6)は、病院や訪問看護、特別養護老人ホームなどさまざまな場所での勤務があるベテラン。午前8時から午後5時までの日勤で、老健利用者のバイタルチェックや口腔ケア、服薬管理などに加え、食事や排せつの介助なども行う。「介護職のフォローも重要な仕事の一つ。一方、医療依存度の高い人がおられる時などは責任の大きさを強く感じます」。退所者の看護記録や病院の地域連携室との対応なども、看護師ならではの仕事のひとつだ。

転職のきっかけは、ワークライフバランスだ。長年、夜勤や早番を含む不規則な勤務を続け、在宅中も緊急時に備えた「オンコール」(待機)などで気が休まること少なく、身体を壊したこともあった。「近くで暮らす息子夫妻に子どもが生まれたこともあり、少しでも協力できれば」と。娘が出産のため里帰りをしている際、職場に長期休暇を願い出た。一方、新たな職場を経験したことで生まれたスキルアップの意欲もある。「認知症患者のケアや看取りを担う経験もありそう。機会があれば、勉強していきたい」

さまざまな職種のスタッフが連携し、個々に最適な医療介護を届ける水澄み会。ここでは、最後の暮らしを信頼して委ねられるメンバーが揃っている。

元松江市内に新施設が建つと知り、就職を希望。21年から約1年間、浜田で働いたのち、松江に異動した。河野さんが水澄み会を選んだ大きな理由がもう一つある。スタッフの層の厚さだ。法人全体で管理栄養士が8人おり、後輩の育成にも力を入れる。「新人時代は、担当の先輩が一人一人の個性や成長具合に合わせて指導してくれました」

食事は、誰にとっても必要不可欠なものであり、暮らしを彩る楽しみの一つだが、体が思うように動かさず、リハビリに励む人らにとっては、その重要性が一層増す。「利用者さんの体重の増減や体調、摂食量、嗜好などを見て、細やかにマネジメントするよう心掛けています」と河野さん。老健は、専門スタッフによるリハビリを通じて在宅復帰を目指す施設で、入所期間は原則3か月。中には、病院から退院後、そのまま施設入所する人もいる。「入所時はやせていた人が、言語聴覚士さんたちとの協力の結果、7キロも体重を戻して元気になってくれた時はうれしかったですね」。一方で、食べられない人や体重が戻らない人もいる。「管理栄養士同士はもちろん、看護師や介護士ら多職種と連携して、利用者さんの支援を心掛けていきます」

**働きながら資格取得を目指す**

専門学校でリハビリを学んでいた池田悠登さん(22)は今春、習得した知識や技術を活用できる仕事を考え、介護職として入社した。「自らが受けたと思う医療と介護」という法人の理念に惹かれました。事情で専門学校を中退したが、リハビリ職を目指した思いが消えたくはなかった。野球肘を患った高校時代、理学療法士が親身になってくれたのが強く印象に残っていた。「人と深く関わりながら、復調をサポートしていきたい」

松江センターアゼリアでは、入所者が10人程度のユニットに分かれている。池田さんは一つのユニットを担当し、排せつや入浴、食事などを介助。「時には、食事や入浴を嫌がられる方もおられます。そんな時は少し話題を変えたりして、気分が乗ってこられた時に再度呼びかけるなど工夫しています。入所後は会話が少ない方が、笑顔で話されるようになるとうれしいですね」

介護福祉士の資格は、3年の実務経験を経て受験できる。池田さんは、《KOYAMA college》を活用しての資格取得を目指しつつ、介護に必要な薬の知識など幅広い分野の勉強にも挑んでいる。